

農作物技術情報 第3号 野菜

発行日 令和4年 5月 26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 全般 排水対策の実施、かん水設備の導入について検討しましょう。
- ◆ 施設果菜類 温度管理の徹底、草勢維持、病虫害防除に努めましょう。
- ◆ 露地果菜類 土壌水分と地温を確保し、活着促進に努めましょう。
- ◆ 葉茎菜類 雨よけほうれんそうは、ハウスの換気を徹底し、適切なかん水を心がけましょう。露地葉菜類は、害虫の発生状況に応じた早めの防除を行いましょう。

1 生育概況

- (1) 施設果菜類は、半促成きゅうり、半促成トマト、ハウスピーマンとも収穫が始まっており、生育は順調で平年並みです。一部地域で苗の供給遅れによる定植遅れがありました。病虫害では、アブラムシ類、アザミウマ類の発生が見られています。
- (2) 露地きゅうり、露地ピーマンとも一部で定植が始まり、例年並みの5月下旬～6月上旬頃が定植のピークとなる見込みです。
- (3) 雨よけほうれんそうは、低温の影響により生育がやや遅れています。病虫害では、ハウレンソウケナガコナダニの被害が見られています。
- (4) 高冷地のレタス、キャベツは順次定植され、生育は概ね順調です。
- (5) ねぎは、順調に定植作業が進んでいます。一部で低温による生育遅れが見られたものの、全体的には順調に生育しています。

2 技術対策

(1) 圃場の排水対策とかん水

例年、施設・露地共に排水不良が原因と思われる生育不良が見受けられます。水田転作の場合は、水路等の点検整備を行い、圃場外からの水の浸入防止に努めるとともに、降雨後の排水を促すための明渠・排水溝の設置、高うね栽培とします。それでも長時間滞水するなど排水不良が十分改善されない場合は、耕盤破碎や補助暗渠の設置も検討してください。

排水良好な圃場では、かん水を行うことにより生育促進、収量向上、施肥効率の改善などの効果が現れます。近年、定植直後や夏期など高温乾燥となる傾向にありますので、露地果菜類においても簡易点滴かん水装置などのかん水設備の設置・導入を検討してください。

(2) 施設果菜類の管理について

日中の最高気温が30℃を越えないよう、こまめな換気を行うなど、温度管理の徹底に努めてください。果菜類全般に、気温の上昇とともに収穫量が増加し、逆に草勢は低下してきますので、長期安定生産に向けて追肥やかん水、整枝、誘引などの作業を遅れないように実施し、草勢の維持に努めます。

ア きゅうり

根張り不良で草勢が低下している場合は、低段位の雌花を摘花します。また、側枝の発生が弱い場合は枝整理を遅らせる等、草勢の確保に努めます。

定植時期が早い半促成作型等では群落内への採光・通風を改善するため、葉ができてから45～50

日経過した葉を中心に積極的に摘葉を行います。草勢維持のため、株当たり一度に2～3枚以内を原則としますが、主枝葉が25枚程度展開したあとであれば、一度に5枚程度摘葉しても問題ありません。

イ トマト

第5～6段花房開花以降、急激に草勢が低下するケースが多いことから、第1～3段花房において適切に着果制限を行うとともに、生長点が細くなる等の草勢低下の兆候が見える前から、①基肥の肥効を維持させながら早めの追肥を実施する、②適正着果数に調整し追肥を行ってからホルモン処理をするなどの草勢維持管理を徹底します。

6月は好天時に尻腐れ果の多発や急激な気象変動による生長点の萎れが発生する傾向にあります。今後の生育や天候に留意し、それに見合ったかん水を行います。また、畝を黒マルチで被覆している場合は、根の活性適温（地温15～22℃）を維持するため、通路と畝の肩まで白黒ダブルマルチで被覆し、地温上昇を防止します。

ウ ピーマン

ピーマンは他の果菜類より根域が浅く狭い傾向があるので、気温の上昇とともに着果数や葉数が増加する時期は土壤水分が不足しないようにかん水量や回数を増やします。

初期はV字型（直立ぎみ）、主枝が伸びてきたらU字型（開帳ぎみ）に誘引しますが、品種によって草勢が異なるため、生育を見ながら調節し、生長点が上向きになり主枝が優先するように誘引します。草勢が弱い場合は、主枝が芯止まりにならないように、側枝を2～3節で摘心して主枝を強く伸ばし、過着果にならないよう摘果します。

エ 病害虫管理

病害では、低温時にハウスを密閉すると湿度が一層高まり、灰色かび病の発生が助長されることから、殺菌剤の予防散布を行います。また、細菌病や、ウイルス病の感染拡大を防ぐため、わき芽取り、整枝及び摘葉は傷口が乾きやすい晴天時に行います。

害虫では、アブラムシ類、アザミウマ類及びコナジラミ類などの発生が目立ってきますので、ウイルス病の感染防止の観点からも発生初期の防除やハウス内外の除草をしっかり行います。

（3）露地果菜類の定植と定植後の管理

ア きゅうり

生育初期に十分に根群を発達させることが、長期安定生産を実現する重要なポイントです。これは、キュウリホモプシス根腐病対策としても非常に重要な基本事項ですので、以下のとおり定植から定植後1ヶ月間の初期管理をしっかり行い、根群発達を促します。

初期生育を良好にするため、防風対策をしっかり行うとともに土壤水分が適湿な状態でマルチを張り、15℃以上の地温を確保してから定植します。

定植作業は晴天日を選んで行い、根鉢の部分が乾いたら株元にかん水するなど活着を促します。また、定植直後の防風保温対策として、ポリキャップなどの利用が効果的です。

定植後、本葉10枚ころまでに主枝の7節以下の雌花と5節以下の側枝は早めに除去し、着果させる節位は必ず30cm以上で8～10節からとします。ただし、節間が短い場合や生長点が小さい場合は着果させる節位を2～3節上げ、草勢の確保に努めます。6～8節から発生した側枝は1節摘心、それ以上から発生した側枝は2節摘心、孫枝は1節摘心を基本とします。

病害では、梅雨時期は、「黒星病」「斑点細菌病」「べと病」を重点とした薬剤を選択し予防散布に努めます。なお、最近、一部地域で黒星病対象薬剤の耐性菌が発生している事例が見られますので、薬剤散布の効果が見られない場合は最寄りの農業改良普及センターに相談してください。

イ ピーマン

温暖化に伴い、ここ数年、収穫初期からの尻腐果の発生が問題となっています。尻腐果は、石灰欠乏が要因で発生し、土壤乾燥や過湿など根の活力低下を招く状況は発生を助長します。そのため、根量が少ない生育初期は、特にも地温18℃以上の確保や適切な土壤水分を維持することが重要になります。そのためマルチの設置は適切な土壤水分の時に、定植まで1週間以上確保し早めに設置し

ます。

定植後の管理では、トンネル栽培では、日中はトンネル内が高温になりやすく、生育障害（葉焼け、落花等）が発生しやすいので、被覆資材を開放して換気を行います。有孔フィルムは、最低気温が 17℃を超える頃を目安に除去しますが、低温が予想される場合は被覆期間を延長します。かん水設備がない圃場では尻腐れ果の発生が懸念されますので、カルシウム資材の葉面散布を行います。

露地栽培では、定植後は株元かん水により活着と生育促進を図るとともに、仮支柱に固定し風による倒伏を回避します。

露地およびトンネル栽培の整枝は主枝 4 本仕立てで側枝は放任とします。3 本分枝は過繁茂の原因となりやすいので、誘引開始時まで整理します。第 1 分枝の下部より発生するわき芽は随時かきとり、誘引後はふところ枝が過繁茂にならないように適宜剪除します。

誘引は、うねの両側に支柱を立てマイカー線やフラワーネットなどを高さ 50～60cm で水平に 1 ～ 2 段張り、枝が垂れ下がらないようにします。

（４）葉茎菜類の栽培管理

ア 雨よけほうれんそう

これからは日長が長くなり、ほうれんそうが抽だいしやすい条件になるので、抽だいにくい品種を用いることを基本とします。

近年、6 月でも高温になることが多く見られるので、換気を徹底しハウス内の温度が上がりすぎないように注意します。また、生育が停滞しないよう播種時のかん水は十分行い、本葉 3 ～ 4 枚以降は圃場の乾燥状態に応じて生育中のかん水を行ってください。

高温傾向になると、萎凋病を中心とした土壤病害が早くから発生することがあるので、例年土壤病害の発生が多い圃場では、計画的に土壤消毒を実施してください。

最近、べと病レース 7 までの抵抗性を持った品種の作付けが多くなっていますが、抵抗性を打ち破るべと病が発生する可能性があります。梅雨入りの平年値は 6 月 15 日頃で、ハウス内の湿度が高まりやすくなるので、ハウスの換気とともに、適用のある殺菌剤の予防散布を心がけてください。

現在、ハウレンソウケナガコナダニの被害が広く見られているので、次の防除対策を実践してください。

- 未熟な有機物（ワラ、モミガラ、堆肥等）を施用しない。
- 被害の見られる株や残さはハウス外に持ち出し処分する。
- 生育中のかん水を行い、収穫直前まで圃場の表面が湿った状態を保つ。
- 農薬による防除は、農薬使用基準を遵守し、土壤処理剤と茎葉散布剤を併用する。茎葉散布剤は、ムラなくかかるように必要な量を丁寧に散布する。

また、アブラムシ類の発生が見られる場合は、適用のある殺虫剤で防除します。ハウレンソウケナガコナダニに適用のある殺虫剤は、アブラムシ類に効果のないものが多いので、注意が必要です。

イ キャベツ

既にコナガ、タマナギンウワバの成虫の発生を確認しています。

これからコナガの重点防除時期になるので、幼虫の発生を確認したら早めに防除を行います。また、これから定植する作型では、必ず定植時に殺虫剤を施用します。

ヨトウガは、今後の発生予察情報に留意し、適期防除に努めます。なお、同系統の薬剤の連用としないように注意して防除します。

ウ レタス

ナモグリバエの重点防除時期である5月中旬～7月中旬は、定植直後から加害が始まるので、育苗期～定植時のセルトレイ施用剤が効果的です。散布剤による防除は、葉の被害を観察して実施してください。

【散布剤による防除適期の判断方法】（写真参照）

最上位葉から数えて、2～4枚目の葉を観察し、幼虫の食入痕が見られた場合（写真の2、4葉にみられる被害程度）が、茎葉散布による防除適期です。



エ アスパラガス

普通作型のアスパラガスでは、L品の割合が20%以下になった頃が収穫終了の目安です。立茎栽培（二季どり栽培）を行う場合には、さらに早く春芽（立茎前の萌芽）の収穫を終了します。

春の収穫が終了した後、茎葉が繁茂する前から、斑点病、茎枯病を対象とした殺菌剤を予防散布します。なお、近年多発傾向にある茎枯病は、萌芽直後2週間以内の茎で特に感染しやすいため、立茎開始直後が最重点防除時期になります。倒伏防止用のフラワーネット等の利用や雑草防除により、通風や日当たりを良くするように心がけます。薬剤のローテーション散布、ひこばえや実こぼれ苗の除去、適正な立茎本数と下枝除去による過繁茂防止、降雨による泥はね防止対策も併せて実施します。

また、アザミウマ類の発生が見え始める時期ですので、発生を確認したら速やかに防除を行います。

オ ネギ

定植後1ヶ月程度たってから培土を開始し、その後も生育状況を見ながら追肥、培土を行います。生育が遅れている圃場は、無理な培土を行わず、生育に合わせた作業を心がけます。

アザミウマ類やネギコガ、ヨトウムシ類の発生が見え始める時期ですので、初期防除に努めてください。

春の農作業安全月間 [4月15日]

「農作業 ゆとりと声かけ 二刀流」

山火事防止運動月間 [3月1日]

「山火事を 防ぐあなたの 心がけ」

岩手県では例年3～5月に、野山が乾燥し、野焼きが原因と思われる林野火災が多発しています。やむを得ず野焼きを行う場合は、消防署に届け出たうえで、火の取り扱いに十分注意しましょう。

次号は6月23日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。